

総門は、藩主であった毛利一族が 1691 年に建てた黄檗宗東光寺の入り口である。黄檗宗は 17 世紀に中国から日本に伝来した。総門は残りの東光寺の建物のように、日本と中国の建築様式を織り交ぜたユニークな作りとなっている。門の屋根とその金属装飾は中国式であり、装飾が施された屋根にはインドが起源となる伝説の魚、摩伽羅が描かれている。これらの特徴は鰐と呼ばれる、虎の頭と鯉の胴体を持つ日本の神話動物にも表れている。この水に関する像は、門を火から守るためのものである。門の赤い色は、ベニガラと呼ばれるミネラルベースの染料によるものだ。右側にはニンニクを食べた人や飲酒した人が寺院に入るのを禁じる石碑が立っている。強い香りの野菜と中毒性のある物は悟りへの道を妨げると信じられているため、これはすべての禅宗寺院で共通の規則となっている。